



Title	高密度生活空間における集団密度の影響に関する研究
Author(s)	川道, 麟太郎
Citation	大阪大学, 1980, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/32956
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉 大阪大学の博士論文について 〈/a〉 をご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏名・(本籍)	かわ 川	みち 道	りん た ろう 麟 太 郎
学位の種類	工	学	博 士
学位記番号	第	4 9 8 2	号
学位授与の日付	昭和 55 年 4 月 25 日		
学位授与の要件	学位規則第 5 条第 2 項該当		
学位論文題目	高密度生活空間における集団密度の影響に関する研究		
論文審査委員	(主査) 教授	足立	孝
	教授	岡田 光正	教授 川崎 清 教授 上田 篤

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、高密度生活空間において集団密度が人と人との相互作用に及ぼす影響に注目して、高密度の社会的機能面での影響を明らかにしようとする建築計画的な研究をまとめたもので、4章と結語から成っている。

第1章は序論であって、研究に必要な諸概念の定義と研究の目的を明らかにし、関連の既往研究について、特に環境—行動研究分野での必要な知見と問題点を整理して、本研究の立場と方法を提示している。

第2章から第4章は、建築計画の対象となる日常的な生活空間における高密度の影響を調べるために、近隣空間、住居空間、施設空間の3つの生活空間を対象に調査を行い、その結果を分析し記述しているものである。

第2章では、住宅地での高密度が、そこを日常の生活領域とする児童の交友や就遊に及ぼす影響を調べ、密度の上昇に伴い友達形成の縮小化や遊びの不活発化が進む傾向を明らかにしている。ただし、この傾向は、一般の低層既存住宅地と計画団地を通じて連続的に生じるものではなく、両者で傾向の現われる密度水準や影響の現われ方に相違のあることを示し、それらの相違は両者の間の空間的条件の違いによるところが大きいことを指摘している。

第3章では、局住室での高密度が、居住者の対人関係に及ぼす影響を、同一居住室でありながら、同室者数に変動のみられる大学寮に注目して調べ、同室者数の増加に伴ってプライバシー評価が悪くなり、実際の日常生活行動にも影響が及ぶことや、プライバシー評価の悪いものは人間関係もうまくいきにくくなることを明らかにし、さらに、3人室と4人室の比較から集団単位としての問題が密度

の影響を論じる上で重要な要因になることを指摘している。

第4章では、小学校運動場での高密度が児童に及ぼす影響を、各小学校で決められている運動場利用に関する規則並びに不慮の事故件数に注目して調べ、児童一人当り運動場面積の低下に応じて、遊びを規制する規則の出現率が高まり、事故件数は山型のカーブを描いて変動することを示し、高密度ないしは過密に対して規則の設定といういわば人間特有な社会文化的要因を介在させて、それに対処する事象を明らかにしている。

結語では、各調査研究の結果をとりまとめ、高密度生活空間が社会的相互作用に及ぼす影響の特質について記述し、高密度生活空間に関して密度の意義と密度の制御の必要性を指摘し、建築的対応について付言している。

論文の審査結果の要旨

わが国の生活空間が、狭少を余儀なくされている現状に鑑み、本論文は、高密度生活空間において集団密度が人と人との相互作用に及ぼす影響を、近隣空間・住居空間・施設空間のそれぞれについて確かめ、密度の意義とその制御の必要性を論じ、対処反応 (coping response) の概念を導入して密度の影響の諸形態が説明できることを明らかにしたもので、その主な成果を要約すると次の通りである。

- (1) 自然形成的な低層住宅地でグロス300人/ha以上、また、中高層計画団地で街区レベル900人/ha以上の高密度住宅地における児童の交遊は、密度の上昇に伴って、友達の学年構成と地理的分布や人数などにおいて縮小化する傾向を明らかにしている。
- (2) 大学寮において、1部屋3人以上同居する場合は、こみあい (crowding) の影響が顕著に現われ、人間関係の評価が悪化する傾向があることを確かめている。
- (3) 運動場の広さが児童1人当り3m²以下の小学校では、空間利用圧 (congestion) の影響によって、遊びを規制する規則が著しく厳しいものになり、活発な遊びを減退させて事故件数を減少させる。一方、児童1人当り8m²以上の場合には、当然、規則は少なく、あってもその内容はゆるいもので、事故件数は3m²から8m²までの各段階にある学校群に比べて少なくなるなどを明らかにしている。以上の研究結果は、計画要件として重要な密度に関する新しい知見を与えるもので、建築工学に寄与する所が大きく、博士論文として価値あるものと認める。